

「J a L S A 教員研修会のためのアンケート調査結果」 活用して日本語教育の質の向上に生かそう

◆日本語学校運営の悩みと問題点が網羅されたアンケート結果

全国日本語学校連合会（J a L S A）が、J a L S A初の試みとして「第 1 回教員研修会」を、昨年 7 月 31 日から 2 日間にわたり、滋賀県長浜市内で開催したことは、すでにこの欄で報告した。これに伴い「教員研修実行委員会」（実行委員長／長岡博司・翰林日本語学院校長）を立ち上げ、J a L S A 会員の日本語学校の先生方にアンケートを採り、回収結果を 6 月 23 日、「J a L S A 教員研修会のためのアンケート調査結果」としてまとめ、当日会場で配布した。教員研修会では、時間の制約もあり、アンケート調査で浮かび上がった日本語教育の問題点をすべて取り上げることはできず、問題を①学生の学習意欲の向上、②教員の効果的な指導法にテーマを絞り研修会を行った。

アンケートの回答は、これからの「学校運営の改善」「教育方法の改善」「留学生の生活指導の改善」など、すべての分野に渡っての問題や悩み、有意義で貴重な意見が含まれており、改めてここにその回答の主要な部分の概要を学校運営に資するために紹介したい。

◆課題はカリキュラム・クラス設定、日本語習熟度、授業態度・生活面

アンケートの調査結果は配布が 150 校に対し、回答は 66 校 95 人に及び、回収率は約 23% だったが、回答者は校長 5 人、副校長 3 人、校長・教務主任 42 人、専任教師 38 人、学科長 1 人、教務副主任 1 人と回答者は各層に及んでいた。また、担当クラス別でも、回答者は入門から N4～N1 級、超級担当のすべてに渡っており、日本語学校が抱える問題点や悩みがほぼ網羅的に投影されており、調査結果を生かすに十分な回答が寄せられていた。

そこで本欄ではさらにアンケート調査結果を生かすべく、特に「日本語学校内の問題点」に関して、留学生の母国を非漢字圏、漢字圏別に紹介した部分について詳しく分析を進めた。第 1 番目に挙げられたのは「日本語学校内での問題点」。調査の 1 番目の要であり、回答の多い順から言うと、①カリキュラム・クラス設定、58 (3.17%) ②日本語習熟度、51 (27.7%) ③授業態度・生活面、46 (25%)。以上の 3 つが、半数前後を占めており日本語学校の 3 大課題と言える。以下は、④卒業後の進路、24 (7.66%) ⑤その他、5 (2.7%) だった。⑤は

「講師の育成・人材確保」「教員の意識改革」「到達度評価方法・基準」「教師不足」「2年目の出席率低下」だった。背景には近年、中国、韓国、台湾に加えてベトナム、ネパールなど「非漢字圏」の学生が急増していることが挙げられるだろう。

アンケート調査は、そこで上記についての回答をさらに「漢字圏、非漢字圏の問題」ごとに回答を分けて表示しているので、以下に詳しく紹介したい。

◆カリキュラム・クラス設定：編成の難しさ、望ましいN1先生の確保

非漢字圏では「カリキュラム・クラス設定の難しい」「会話と表記の差が著しい学生のクラス編成」の難しさを訴えていた。また「読解表記に問題のある学生が多い。JLPT（日本語能力試験）を基準にしても4技能のバランスが悪くてクラス編成に悩む」「国によって4技能の習熟度が異なるため、レベルチェックで進級する際にクラスの中で国が偏りやすい」との意見もあり、4技能（聞く・読む・話す・書く）のバランスをいかにとるかも課題として浮かんだ。

また、「到達度、完成度を重視すればクラス数が多くなる」と、クラス編成の難しさを訴えていた。また、授業態度とも関連するが、漢字の指導が難しいと訴える回答もあった。例えば、「漢字指導（特に興味がない学生に対して）が困難。初級の段階ではあまり辞書は必要ないものの、持参してこない学生が多い。そもそも辞書でよいものがない。集中力の欠如。学習習慣がない」という指摘だ。

一方、漢字圏では「試験対策などを好みグループワーク、会話には消極的な学生が多い」と実利に走りがちな留学生の姿を映し出している。また「教育レベルが高い学生には、先に進みたくても他の学生のスピードとレベルに合わせなければならず、十分に能力を伸ばせない」との悩みも訴えられた。

そこで「漢字学習も非漢字圏と一緒にいるため、中国人学生はN1、N2を受験する場合、ほぼ自習をお願いしている」や「非漢字圏の学生が多いため、EJU（日本留学試験）対策などをしっかりできてあげられなくなった」などの回答もあった。回答には特にN1を目指す留学生に満足に応えることができないことに悩む先生が増えており、総じて「難関大学への進学を希望したり、N1合格を目指す学生に適切なクラスを設けることができない」と訴えている先生方の姿が目立った。やはり、N1クラスの留学生を教えられる教師の獲得、クラスの充実・設定が大事なことを伺わせた。

◆日本語習熟度：非漢字圏は到達度が遅く、漢字圏学生は会話力が不足

非漢字圏の学生は、到達度の遅い学生が問題と捉えている回答が多かった。例えばJLPTでの合格率などへも繋がらずに日本語学校での2年を修了してしまう学生が多く、当校でも改善策を図っている」とか「多くの学生がN3合格もおぼつかないレベルに留まっている」

「1年たっても『みんなの日本語Ⅰ』を終了できない学生がいる」「特に漢字が読めない。語彙の理解ができない、読解が難しい」と一様に非漢字圏の学生を教える難しさを指摘している。

この漢字を教える難しさは、前述のカリキュラム編成とも連動するが、ベテランの日本語教師が指摘するのは「1つの試みは語源辞典を使って象形文字から生まれた漢字の語源、成り立ちを教えてあげること。これで漢字にぐっと親しみを覚えます」と言う。語源を知るとは漢字に対する興味を湧かせる一つの試みと言えよう。

一方、漢字圏での留学生については、4技能のうちの「話す・会話力」の不足を指摘する先生が多かった。「運用力がついていない学生が多い。N1・N2に合格していても、まともに会話ができない」とか「能力の偏り、会話力が弱い学生が存在する。日本語学校が大学院・学部進学、専門学校進学を目指すため、文法など授業に偏っているためと考えられる」「漢字（文字・語彙を含む）・読解・試験はよくできるが、会話力をもっと伸ばす工夫」との指摘もあった。他には「日本語ができて基礎学力がない学生も目立つ」との意見もあった。

逆に「求められるレベルが高くなっている。実践的コミュニケーションやアカデミックジャパニーズ（AJ）」について十分に指導できる講師が少ない」との先生側の問題点を指摘する回答もあった。AJは大学で学ぶために必要な日本語で、十分な発音・アクセント、文字、表記、語彙、文法などを指す。高度な能力を持った先生不足の現状があり、日本語教育機関の業界全体で取り組む必要があるようだ。年齢制限を超えてベテラン教師の雇用も積極的に進めてもいいのではないだろうか。

◆授業態度・生活面：増殖する中国進学塾に対応が必須！

1) 授業態度：学習意欲は人生目標の設定にかかると！ 小テストで基礎習得徹底を

非漢字圏の学生は、ベトナムの学生に対して多いが学習意欲の低さを指摘する回答が多かった。例えば「漢字のハンデがあるにしても中級以上の学習にとたんに意欲を示さなくなる傾向がある」とか「理解力不足、アルバイトなどの生活の疲れ、中・上級の日本語力を目標としないことなどが、学力は頭打ちとなる。そのため授業に集中せず、私語・居眠りなどの兆候」が表れる。「教師によって授業態度を変える学生（居眠り・母国語での私語・カンニング・スマートフォンの使用・姿勢など）が多い」。これは漢字圏の方でも同様の回答があった。中には「カンニングについてあまり悪いことだと思っていない」との指摘もあった。これは不正や汚職を生む土壌となる悪しき習慣であろう。カンニングがいかにも不正な行為で社会の発展を歪めるものであるかということをお説く必要性もありそうだ。こうした中で、むしろ「改善のために」なる良い指摘も回答の一部にあったのでここに紹介したい。

「展望がない学習者は日本語を習得することとリンクしていない。進学を考える際、JLPTやEJUの目先の目標ではなく長期の目標を設定する必要がある」と指摘しているが、これは漢字圏の学生にも言えることだが、学習意欲の低下をいかに防ぐかという問題と関連

しており、入学当初に新入生にしっかりした人生の目標などの長期目標を持つことの重要性や苦勞して育ててくれた親の恩に報いる覚悟、母国を辱めるような行為を慎むことも説く必要があるのではないだろうか。

一方、漢字圏の方でも非漢字圏の学生と同様の訴えや悩みが回答に見られた。「下のクラスは習得が遅いばかりか意欲低下で授業中に寝ている学生も多いので手を焼いている」とか「わかると思いこんだり、基礎をきちんと学習しない学生が少なくない。結果レベルが上がらない（いつでも初級ミスをしている）」と悩みを訴えている。日本語の基礎を学ぶ重要性はことあるごとに説いて、小テストを繰り返し、習得できているかどうかを確かめることが大事だ。いずれにしても東京大学の栗田佳代子准教授が、先の教員研修会で強調した「授業で『学生がやる気がない』と言う先生がいるが、これは教員の責任です。『学生が悪い』ではなく、こちら側が常に気をつけないといけない」と指摘したことを改めて肝に銘じたい。

そうした中で日本語学校以外の塾に通う問題が新たに指摘された。「中国人向け進学塾に通い、日本語学校の授業を軽視している。ゲームアニメに夢中」。あるいは「塾に通う学生が多く、塾中心の生活に」なって、日本語学習が疎かになっていると警告している。

フリージャーナリストで日本の中国人社会にも詳しい中島恵さんが東洋経済オンラインに「大久保で増殖中！ 中国人向け『予備校』の衝撃」（2016年10月8日）という記事で、主に中国の学生向け進学塾の台頭を報告している。塾は様々あり、今や大小合わせて10校近くあるという。運営、教師は中国人で固めており、ある大規模塾は1200人の学生が在籍しており、主に日本語学校に通わないとビザがおりないために昼と夜のダブルスクールにして、塾に通えるようにしているという。学費は年70万円程度だが、2年で140万円となる計算だ。英語、数学など大学受験に必要な科目を教えている。中には中国の富裕層を対象にした高額なマンツーマンのVIPコース（対象50人）もあり、親は一流大学に合格させてくれるならば、200万円、400万円でも出すと言っているという。しかも、学生は熱心に勉強しているという。これでは日本語学校の先生方の回答が「塾中心の生活になると遅刻・欠席が多くなる」と嘆くのも無理はないと思える。日本語習得が疎かになっては本末転倒になり、早期に何らかの対策を打たないと大変なことになるだろう。

2) 生活面：ゴミ出し問題はやってみせ、環境面のプラスを説く。生活習慣の習熟を

非漢字圏の留学生は初めての異文化との接触による混乱が見られ、「日本文化や一般的な知識の不足」からくる問題が多いようだ。典型的なのはゴミ出し。これは漢字圏の学生も同様で、「アパートの掃除ができない（信じられないほど汚い）。アパートでのゴミの分別ができない、夜騒ぐ」「環境の違いに慣れずに体調を崩す学生が多く。時間や出席への考え方が違うのを修正できない」「時間を守る、やるべき事を最優先に考えるなど、自律した生活ができない学生が多い」といった回答があった。

いずれも初の日本生活でのとまどいを感じられるが、生活習慣が母国といかに違うか、整理・整頓・清潔の大切さなどは、入学早々に何度も実際にやって見せて教える必要性があり

そうだ。また自律できない学生に対しても自主自律の必要性を説いて、それが人間の成長に必要なことを説いて納得してもらい以外にないだろう。場合によってはゴミの分別が環境問題の解決のうえでいかにプラスになって大事かまで説くことも必要だろう。

漢字圏では、問題を指摘する回答は3点だけだった。「ゴミ出し」以外は「生活面（アルバイト、寮）への不満」「出席率（95%維持できない）」などだ。

3) アルバイト：難しい勉強とアルバイトの両立は本人の自覚にかかる

この回答は非漢字圏のみだった。「金銭的に余裕のない学生が多い。それを補うアルバイトで本来すべき勉強が疎かになっている」が代表的意見で、回答があった8件とも皆関連していた。ただし、一件だけ「アルバイトをよく休む（アルバイト先からクレームがくる）」とアルバイトのサボタージュが報告されていた。これは恐らく留学生の万国共通の悩みだろう。本人の自覚以外、身を立て直す手段はないだろう。

◆卒業後の進路：日本語習得の大切さ説き、偉人の話で夢を与えよう

この問題は、アンケートの「日本語習熟度」や「授業態度・生活面」とも関連しているが、非漢字圏の学生には、ビザ取得のために日本語学校を利用して留学し、実は大学、大学院、専門学校などの入学のために準備を進めているケースや、就職を目的にしていたことを指摘する回答が目立った。例えば「日本語が勉強できるような専門学校に安易に進学しようとする」「大卒で入国、大学院、専門学校希望ということで準備を進めていて実は就職希望という学生が少なからずいる」「短大卒以上で日本語が初級レベルなのに、就職する学生がいる」との回答があった。日本語学校に学ぶ留学生の姿勢の安易さが見られる。このような学生に対しては、日本語の習熟という最も大切な目的を軽視することの危うさを説き、後に日本語の習得を疎かにして後悔する事態を招くことになることを、入学当初から警鐘乱打する必要がありそうだ。

他方、「ムダに日本に残りたいという学生が多すぎる。もっと自分の夢のために、卒業したら帰国してすぐに日系企業などで働きたい！という、そのくらいの覚悟で2年間過ごす学生が多くてもいいと感じる。何の夢もなく専門学校に入りたいという学生が多すぎる」という回答や、「進路を決める際、学部や専門ではなく学費で決める学生が多く、志望理由がない」という回答も目立った。「少年よ大志を抱け」のクラーク博士ではないが偉人の話なども授業に交えて、留学生に夢を抱かせることも必要だ。吉田松陰、西郷隆盛、野口英世から白鵬・日馬富士（まだ未成年で、はるかモンゴルから来日したという大きなハンデを背負いながら角界のトップにまで上り詰めた二人の努力は並大抵ではない）に至るまで歴史上の人物から現代人に至るまで教材に溢れている。また、日本との懸け橋となった母国の偉人の話を調べて、授業で紹介するのも一層効果がありそうだ。

一方、漢字圏の学生については、非漢字圏の学生と反対に、大学の名前にこだわって実力

以上の大学を選ぶ学生が少なくないことに先生方が手こずっている姿が浮かぶ。例えば「読み書きが難しくこなせても会話が伴わないことで、進路希望先の面接がうまくいかないケースもある。希望校と学生自身の日本語力に差がある。かつそのことを学生本人がわかっていない」とか「JLPT取得と目的なく大学のブランドにこだわりがちなことが課題」「塾の影響も相当あると思われるが、大学という名称にこだわる学生を説得して、例えば専門学校に目を向けさせることの大変さ」と回答してきている。

こうした学生には厳しくとも学生の真の実力がどの程度なのか、きちんと説明して説得するしかないと思う。学生は学問とアルバイトの両立で酷と思われるかもしれないが、悔しかったらもっと勉強しなさいと言うしかないのではないだろうか。

◆その他：教室確保を問う回答も。日本語習得は日本を知る大事な入口

問題は、すでに出尽くしているようで回答は少なかった。「学生の問題ではない。教室の確保ができれば解決することもある」とクラス数の少なさを指摘する回答もあった。また、「非漢字圏の学生の増加に伴い進学できる専門学校が足りていない。大学に進学した学生にとっても学費の面で難しく、結局やりたいことが学べる学校ではなく、経済面が許す学校に流れてしまう。そのモチベーションで勉強している学生の中には、勉強意欲が低下してしまうことも多々ある」と専門学校の少なさを指摘し、かつ学費負担の比重が高く、目指す大学には入れずに学習意欲を低下してしまうと指摘している。

総括して述べると、日本語教育機関、つまり日本語学校もまた立派な学び舎、学問の府である。日本語を習得することは日本文化、ソフト、社会・経済を知る大事な入り口である。先生方はもちろん、経営者も含めた日本語学校職員全体がその崇高な使命を日々胸に刻み、日本語教育という重要な職責を全うしてほしい。